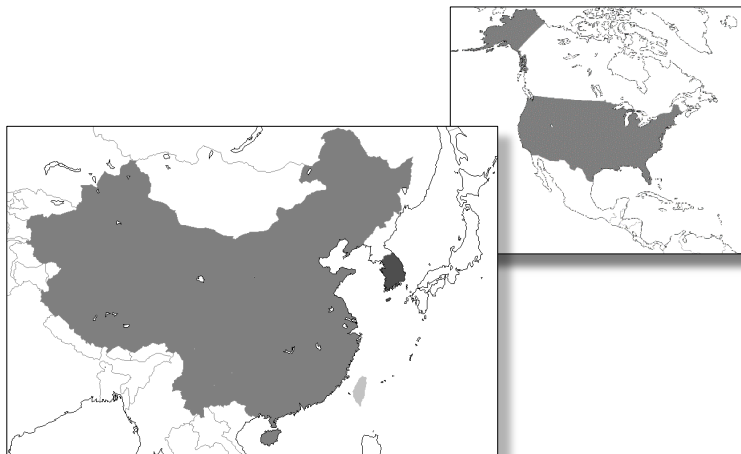


教科書をこえて： 世界史の中の日本の叙述を 手がかりに

上田 貴子



目次

1. はじめに
2. 日本はいかに書かれているか—前近代—
3. 日本はいかに書かれているか—日本の近代化—
4. 世界史にとっての第二次世界大戦
5. 日本の歴史はだれのもの
6. おわりに

1. はじめに

日本史を研究していた中国人留学生の後輩が、帰国して中国の大学の世界史専攻の教員になった。このことを知った時に、軽く不意をつかれたような思いがした。日本の歴史が日本以外では外国史で世界史の一分野になることは、考えてみればあたりまえのことだ。しかし、それを意識の外に置いていた。私は中国史を研究してきて、日本を外から見る視点を身に着けてきたと思っていた。しかし日本で生まれ育ち、日本で考え

るという主観から自由ではないことをこのとき思い知った。

この章では、日本のことを外から考えることを試みてみよう。素材としては、多くの人が一度はお世話になったことがある歴史の教科書を使う。ただし、日本ではなくアメリカ合衆国・中華人民共和国・台湾¹・韓国の世界史教科書だ。そこに書かれている日本の姿と、その教科書を使っている側の立場を考えてみよう。日本と戦争をした国ならばどう書いているか、何となく想像がつくという人もい

るかもしれない。だが、それは答えを急ぎすぎている。確かに近代部分については、戦争に関する記述は避けて通れない。しかし、それ以外にも書かれていることはたくさんある。あたりまえをこえる思考をするには、網羅することも大切だ。6世紀から20世紀までの日本に関する記述すべてを視野にいれよう。今回とりあげた教科書では日本が登場する部分を大きく分類すると3つに分けられる。前近代つまり日本独特の社会や文化が形成される時期について扱った部分、明治維新前後からの近代化部分、第二次世界大戦にかかわる部分である。これらの3つの部分それぞれをみていくにあたって、日本では重要事項と思われているのに取り上げられていないことはないか。また、日本では取り上げないのに他の国で取り上げられていることはないかという点に、さしあたり意識をむけてみよう。



高校世界史教科書の表紙

上段左から米国(McDougal Littell)、日本(山川出版社の『詳説世界史』)、韓国、下段左から台湾、中国(人民教育出版社)

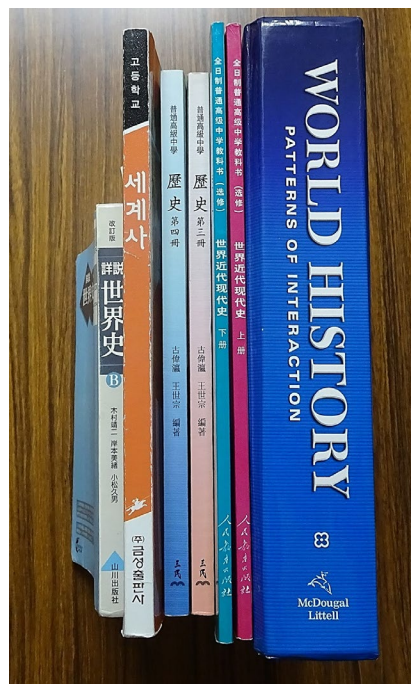
¹ 一つの中国の原則のもと、日本では外交上、台湾を国と認めてはいないが、台湾は中華民国政府による教育政策下にあつて、中華人民共和国とは違う制度にのつとつて教育がされている。中華民国政府の教育制度を反映した歴史教科書を対象としてはいるが、ここではこの地域については台湾と記述する。

2. 日本はいかに書かれているか—前近代—

実際に記述を読む前に各地の世界史の教科書に日本のことがどれくらい書かれているのか、教科書の章・節数に換算して歴史の教科書全体の何%を占めるかみてみよう。

アメリカ合衆国(以下米国と記述する)の高校の教科書『世界史(World History)』(McDougal Littell版, 2007)においては日本をとりあげた節は全体の3.4%を占める。中華人民共和国(以下中国と記述する)の場合は、中学の歴史教科書で割合を検討することにしたい²。北京師範大学出版社版の6冊組の教科書『歴史』(2007)は前半3冊と4冊目の5分の3が中国史、のこりの2冊と5分の2が世界史となっており、世界史の2.7%に日本の歴史が叙述されている。同じ中国語文化圏ではあるが、台湾ではどうだろうか。台湾の三民書局版の4冊組の高校歴史教科書では第3巻第4巻が世界史部分であり、その2.3%に日本の記述がある。さらに韓国の金星出版社版の『高等学校世界史』(2014)においては1.7%に日本の歴史が書かれている。

では具体的に日本のことをどのように書いているのだろうか。米国の『世界史』において最初に日本が登場するのは、「東アジアの帝国 600-1350年」と題された章のなかで、中国の唐と宋、モンゴル帝国を述べた後の部分で「日本の封建権力」と題した節である。そこでは「日本の文明は中国の文化を借りることで形成されたこと、封建的軍事指導者が存在すること」と特徴づけられている。具体的には漢字・仏教・美術・喫茶・政治制度を



同じく高校世界史教科書背表紙
左から日本、韓国、台湾、中国、米国

² 高校での歴史教育は2010年ごろまでは全5冊からなる人民教育出版社版が主流であったが、これは『中国近現代史』上下巻が必修とされ、『世界近現代史』上下巻と『中国古代史』全1巻は選択となっていて、世界史の前近代史が教授対象外となる。近年は教科書の多様化が進んでおり、その一例をあげると、岳麓書社の歴史教科書は『歴史』全3冊、必修1「政治文明歷程」、必修2「経済成長歷程」、必修3「文化発展歷程」からなる。これは中国史を古代から現代まで扱い、外国については古代ギリシアローマ、大航海時代、市民革命、産業革命、近代資本主義社会と社会主義革命に触れている。高校では必修科目としては世界については限られた分野しか扱わないことがわかる。

その実例とし、その立役者として聖徳太子が取り上げられている。また「ほかの文化からの技術を受け入れる開放性は現代にも通じる」という見解もつけられている(Beck, Black, Krieger, Naylor, & Shabaka 2007, pp.339-340)。時代としては、大和朝廷の成立、平安時代から鎌倉幕府までがこの節でとりあげられている。主たる記述のほかには、平安の女流文学と武士をそれぞれコラムでとりあげる(Beck et al. 2007, pp.341-343)。ちなみに日本のあとには東南アジアと朝鮮半島をまとめて1節とし、東南アジアはインドと中国の影響を受け、朝鮮半島も中国から漢字、中央集権や仏教・儒教を学んだとしている(Beck et al. 2007, pp.344-347)。

次に日本が登場するのは、「探検と孤立の時代1400-1800年」と題した章である。ここでは大航海時代のヨーロッパのアジア進出と、中国と日本がヨーロッパとの関係を制限していく過程を描く。具体的には「日本の孤立への回帰」とした節で安土桃山時代と江戸時代をとりあげ、政治と文化を紹介している。そのなかで安土桃山時代に日本がヨーロッパから影響を受けたものの、江戸幕府の下で鎖国政策がとられたことを説明し、鎖国を開国させるのが米国であることを強調して節は終わる(Beck et al. 2007, pp.542-547)。

とりあげられる時代や事例は米国の教科書ではおおむねこれが標準的といえる。もうひとつ手元にある世界史教科書『世界の一体化と世界の分化(Worlds Together, Worlds Apart)』(Norton版, 2011)でも大和朝廷・聖徳太子・大化の改新・源氏物語・武士の登場・江戸時代・近世の国際関係としての南蛮貿易と鎖国について叙述されている。中国大陸の影響をうけた国の一例として古代日本がとりあげられ、近世にはヨーロッパとの最初の出会いがあったことが述べられている。これが米国の教科書で描かれる前近代の日本史のおおまかな流れで、そこに平安王朝文化・武士・江戸文化が個別の特徴として紹介されている。

では、中国語圏ではどのように描かれているのだろうか。中国の教科書では、世界の古代を描く章にあたる部分で四大文明、地中海文明を説明したあとに、それ以外の文明の事例として「“日出る国”と“新月の郷”」と題して、日本とイスラム帝国の成立が取り上げられている。ここでも「模倣の上手な民族」と見出しがつけられ、唐から帰国した留学生の活用による改革として大化の改新がとりあげ、律令の導入を実例として中国の文化的影響を述べている(朱 2007, 8年級下冊, pp.100-101)。奈良時代について述べた後は、近代を扱う単元の導入部分までとび「武士が指導した社会変革」として明治維新

を扱う単元で武家政権について説明がされる(朱 2007、9年級上冊、pp.84-87)。

台湾では第3章「世界文明の進化と相互作用」の第3節「アジアの大帝国の発展」第1項「近世の東アジアとロシアの東漸」として、中国の明朝と清朝、日本の前近代、16、7世紀のロシアを取り上げている。その中での日本の描かれ方は、大和朝廷の成立と鎌倉幕府以降の武家政権、豊臣政権と江戸時代を概説したものである(古,王 2007、pp.152-155)。台湾の叙述も中国文化の継続的な影響を受けた結果として大化の改新があり、唐を手本とする律令制の中央集権国家が成立したことを述べているが、米国や中国の教科書のようにそれを特徴として強調はしていない。また中国語圏の教科書に共通する特徴として、鎖国や南蛮貿易についての説明に紙面を割かない点が挙げられる。

韓国でも第3章1節「東アジア世界の形成と再編」の第5項「我が国と日本における独自の文化の発展」とした部分で、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代それぞれについて概説がされている。そのなかでも、古代の重要事項として大化の改新をとりあげている。ただし中国の影響があったことについては「中国の文化を受け入れ」という記述の仕方をしている(김,장,서,장,김,김 2014、pp.97-98)。次に日本が登場する第4章1節「東アジア世界の発展」の第3項「朝鮮と日本における独自の文化の発達」では、江戸幕府の成立と江戸時代の社会や文化が紹介されている。同時に安土桃山時代の貿易を中心とした対外関係と江戸時代の鎖国についても言及をしている(김ほか 2014、pp.159-160)。韓国のこの教科書では朝鮮半島について先に述べ、さらに日本にも言及するというスタイルをとっており、双方とも中国の影響をうける東アジア諸国として並列しているとみることができる。また米国や中国語圏の教科書では「中国の影響を受ける」という中国を主体とした書き方がされるのに対して、韓国では朝鮮半島や日本を主体においた叙述がされている。では日本の世界史教科書はどう書いているだろうか。これはご自身で確認していただきたい。

世界史の教科書の中にはとりあげられない国もあるなか、前近代の日本はここであげた米国・中国・台湾・韓国のいずれの世界史教科書にも取り上げられている。またいずれの教科書も中国文明の存在を叙述し、東アジアはその影響を受けながらそれぞれの地域が独自の道を歩んでいったことが書かれている。日本はその一例として取り上げられ、叙述の量に違いはあるが、幕府と天皇という二重統治体制を独特な事例として紹介している。

3. 日本はいかに書かれているか—日本の近代化—

近代について書かれる部分は、いずれの教科書もペリーの来航から書き起こされている。中国ではペリーの来航以降の幕末の状況を「幕府の統治の危機」と題し、「近代社会へ突入した維新」と続いて、日本は西欧列強と対等となり、アジアにおける例外として近代化に成功したとする(朱 2007、9年級上冊、pp.84-87)。

台湾では「非西欧世界の危機あるいは転機」と題して1860年代70年代の台湾、タイのラーマ5世の改革、アフリカおよびラテンアメリカの植民地化が述べられる単元のなかで、ペリー来航から明治維新の成功による近代化が述べられる。台湾は比較的叙述量が多く、幕末については大政奉還に貢献した存在として坂本龍馬をとりあげ、明治維新については五箇条の御誓文を資料として掲載している。また、富国強兵策の結果、日清・日露戦争に勝利したとして明治維新の成功を述べている(古,王 2008、pp.68-73)。

韓国でもペリーの来航によって江戸幕府の支配が揺らぎ倒幕運動が盛んになった結果、明治維新が行われたとしている。明治政府の下で富国強兵策による産業の近代化と、議会開設などによる日本の近代国家体制の形成が述べられ、その後の拡張政策による日清・日露戦争と台湾の植民地化・日韓併合までをひとまとまりに叙述している(沼ほか 2014、pp.257-259)。

米国の教科書『世界史』では、「世界の変容 1800-1914年」と題した章の2節目に「日本の近代化」として鎖国の終焉、明治維新、日本の帝国主義、日清戦争、日露戦争、日韓併合が述べられている(Beck et al. 2007、pp.810-813)。

台湾の教科書では非西欧世界における危機を転機に変えた例としてあげられ、米国の教科書でもページの一部を割いて、明治天皇と西太后を並べ、日中の西欧文明への対応を学生に比較させる課題が置かれている。このように明治維新そのものは、非西欧の近代化の成功例として世界史で取り上げられるに値すると評価されているといえる。

ただし、その成功は帝国主義的な植民地を求める対外拡張政策へと日本を導くことが、どの教科書でも述べられている。そのなかで、中国ではアジアの平和を脅かすと評されている(朱 2007、9年級上冊、p.87)。また、米国では近代化により力をつけたことが、国民のプライドを高め帝国主義的な国家への道を歩んだとし(Beck et al. 2007、p.812)、日韓併合をはじめとする植民地獲得をbrutal results(酷い結果)と評している

(Beck et al. 2007, p.813)。また韓国の場合、議会開設過程での自由民権運動の限界が述べられ、戦前の日本の政府を天皇制に基づく排他的民族主義的な存在と特徴づけ、1910年の日韓併合に至るようなアジアへの侵略の道を進むとしている(召ほか 2014、p.258)。

近隣諸国でも米国でも、日本の近代化は成功例とみなされてはいる。しかし、それが帝国主義国家になっていくことが遺憾であるという文脈で書かれているといえる。その遠因を韓国の教科書では天皇に権威を集中した明治の国家体制に起因するという分析をし、米国では強いナショナリズムが外へ向いた結果であると述べている。日本での歴史の学びのなかではこのような時代評価に触れる機会は少なかったのではないだろうか。

4. 世界史にとっての第二次世界大戦

では、その帝国主義の帰結としての第二次世界大戦にいたる拡張主義や、大戦そのものについてはどのような記述がされているのだろうか。実は、戦争そのもの経過については中国・台湾・韓国の世界史教科書においては紙面をあまり割いていない。ヨーロッパと太平洋での戦争のそれぞれの起点と決着をあげ、戦争の悲惨さについて叙述するという構成になっている。

具体的にみてみよう。中国では「世界戦争再び」とした単元の1つ目に「邪悪の枢軸」としてヒトラーによるファシズム遂行およびユダヤ人迫害、ムッソリーニのエチオピア攻撃、スペイン内戦とそれに対するピカソの抵抗としてゲルニカの紹介、日本の満州事変以降の中国侵略の中で行われた731部隊の事例がとりあげられている(朱 2007、9年級下冊、pp.29-35)。戦争の経過自体は「狂乱の戦車」と題した単元で、第二次世界大戦についてはヨーロッパ戦線とともに、真珠湾攻撃によって太平洋戦争が始まったことが取り上げられる(朱 2007、9年級下冊、pp.36-43)。そのあとに「正義の勝利」と題して、戦争の終結が述べられる(朱 2007、9年級下冊、pp.44-50)。

台湾では第一次世界大戦とその後を扱った章のなかで、「アジアの反植民地運動」と題した節で中華民国の1910-20年代が叙述され、日本統治下の台湾と朝鮮についても述べられる(古,王 2008、pp.133-135)。第二次世界大戦については、「世界の覇権争奪」とする1960年代までを扱う章の前半「第二次世界大戦及び戦後国際情勢」と

題した節でとりあげている。しかし経過についてはヨーロッパ戦線を中心に開戦前夜の状況をのべ、戦況についてはほとんど触れず、むしろ戦時国際会議(カイロ会談、ヤルタ会談、ポツダム会談)に紙面を割いている。ただし戦争の悲惨さを考える例として広島原爆投下がとりあげられている(古,王 2008, pp.142-151)。

韓国の世界史の教科書では「二度の世界大戦」とした節のなかの項目に「第二次世界大戦の進行」がある。やはり戦争の経緯はヨーロッパの情勢を中心に描き、サンフランシスコ講和会議および国際連合の成立までが叙述される。そのあとには戦争の悲惨さを扱った特集ページが置かれ、戦争被害者数についてグラフをあげて説明する。アウシュビッツ、日本軍慰安婦、ドレスデン空爆はキャプション付きの写真で紹介され、原子爆弾の投下についてはより詳しい説明つきでとりあげられている(召ほか 2014, pp.296-299)。

米国の『世界史』は第31章「危機の時代1919-1939年」として第一次世界大戦後の世界情勢をとりあげ、世界恐慌やファシズムの台頭にページを割く。そのうちの第4節「侵略者による進攻」では、ヒトラーやムッソリーニとともに日本の帝国主義的拡大が取り上げられている。続いて第32章「第二次世界大戦1939-1945年」には「日本の太平洋への侵攻」とした節で太平洋戦争について叙述がされる(Beck et al. 2007, pp.931-935)。さらに「連合国の勝利」とした節では第二次世界大戦の終結が書かれる中で、硫黄島戦、原子爆弾の投下が叙述される(Beck et al. 2007, pp.945-947)。アジアの教科書が戦闘そのものの取り上げ方が少ないのに対し、米国のこの教科書は戦闘についての叙述が多い点が特徴的である。それとのバランスをとるように第32章の章末には戦争における技術史および戦争の恐怖や被害を考えるコラムが6ページにわたって用意されている。ただし、米国の教科書には他の構成のものもあることも留意しておきたい。『世界の一体化と世界の分化』は戦争そのものにはフォーカスをあてず、第20章「3つの世界秩序」と題して、戦後の東西冷戦および第三世界の独自路線を描く歴史叙述があり、その起点として第二次世界大戦を描いている。

世界史の教科書における第二次世界大戦へのこのような叙述は何を意味するのだろうか。戦争の起点と終結、そして個人が犠牲になる戦争の悲惨さを述べ、戦後の世界情勢が現在へとつながることが述べられるというスタイルは、ほとんどの教科書で共通している。人類の大部分に影響を与えた事件として、客観性を維持しようとしているのだろうか。また、歴史としてこの戦争を後悔し、二度と同じようなことを繰り返さない人類の覚

悟の表れなのだろうか。それとも、第二次世界大戦はすでに過去の歴史上の大惨禍として記述するにとどまっているせいなのだろうか。

5. 日本の歴史はだれのもの

以上のようにみてきた各地の世界史教科書だが、世界史部分だけを見れば、意外に日本のことが評価されていることや、日本のことが酷く書かれているわけではないことに気がつく。また本章の最初に、世界の教科書を見たときに日本では重要事項と思われていることが取り上げられていないこともある可能性を指摘した。では、日本であたりまえと思っているままに日本の姿は認識されているだろうか。ここまで読んできたみなさんそれぞれ受けとめ方に違いがあるだろうが、日本国内の認識と外の認識にずれがあることは同意いただけるだろう。

さて、ひるがえって私たちも同様にほかの国のことをその国の人々の認識とずれた形で理解している可能性がないとはいえない。そしてそれは日本にかかわることもある。中国・台湾・韓国いずれもその国の歴史を扱った部分で日本との関係を述べる部分があるため、学生たちは自分の国の歴史の学習のなかでも日本について知る。つまり日本では取り上げないのに他の国で取り上げられている日本の歴史があるのだ。

それぞれの国の歴史で日本が登場する割合をみてみよう。中国の場合は、中国史全体の5.5%、中国近現代史に限れば12.4%の紙面をさいて日本との関係が叙述されている。中国との間でいえば、日本の教科書にも単語のみ出てくる事項がより詳しく書かれている。日清戦争であれば、黄海海戦の戦況が描かれ、戦死した将官が英雄として描かれる(朱 2007、8年級上冊p.16)。ほかにも日中戦争中の日本軍との戦闘について書かれた部分は日本の教科書には見られない。例えば「百団作戦」を聞いたことがあるだろうか。1940年8月に中国共産党が主導した日本軍に対する大攻勢として中国の教科書には必ず出てくる(朱 2007、8年級上冊pp.98-99など)。

台湾と韓国にいたっては、日本の植民地支配時期を抜きにして近現代を語ることができない。そのためおのずと日本の植民地政策とそこでの人々の暮らしが叙述される。台湾の場合は4冊組の第1巻が台湾史、第2巻が中国史となっており、4篇からなる第1巻の第3篇が日本植民地時代の台湾を扱っている。つまり台湾史の25%で日本の統治下

の台湾が描かれている³。韓国の韓国史は明石書店から翻訳の出ている三和出版社版に依拠すると9つの単元にわけられたうちの7つの単元が近代史となっており、第6単元と第7単元において日本植民地時代が扱われている。第5単元においても李氏朝鮮独自の近代化の努力とともに、日清戦争以降の日本が勢力を伸ばす過程が叙述されているので、全体で33%近くの単元で近代における日本の対外行動に関するできごとが扱われている。

大日本帝国の一部となった台湾と朝鮮半島では日本語教育の強制がなされ、日本国臣民としてその人的資源は様々な場面で使われてきた。世論を賑わしている慰安婦や徴用工の問題だけでなく、第二次世界大戦時には、徴兵の対象となり日本兵として戦場に出た人もいた(イ, チョン, パク, パク, キム, イム 2013, p.276)(薛 2012, p.138)。

以上のように、日本の歴史であるのに、私たちは意外と知らないでいることがたくさんある。このように考えてみると日本の歴史は日本人だけのものではないともいえるだろう。

6. おわりに

「日本の歴史は日本人だけのものではない」と前節を結んだが、納得のいかない人もいるかもしれない。そのひっかかりは重要である。いったい「歴史」ということばを使って我々は何を表現しているのだろうか。過去にあったこと・もの、「この寺院は歴史がある」と表現するような積み重ねられた経験、時間の経過にともなう変化や積み重ねの叙述、これらは歴史事実、歴史的経験、歴史叙述ともいいかえられる。つまり前節最後の歴史とは歴史叙述のどこである。同じものを叙述してもその叙述は一様ではない。

過去にあったことを明らかにするうえで、現在の研究水準において、歴史学は実証的な分析を必須のものとし、歴史事実に対する客観的に確実性の高い見解を導き出すことを旨としている。しかし、それを叙述にしていく過程で、とりあげる内容に対する取捨選択が生じる。また書き手と書かれる対象の関係、書き手が読み手の受け取り方に期待すること、それらの結果として、叙述された歴史には何らかの意図が介在している。このことに対して私たちはもっと注意深く接する必要があるのではないだろうか。

³ 台湾史だけでなく、第2巻中国史は4篇11章27節からなり、そのうちの「押し寄せる外患」という節で、ロシアによる沿海州の割譲や清仏戦争とともに日清戦争について紙面が割かれている。

我々が当たり前だと思い込んでいることは、高校までの教育制度内で共通の基準を共有している人間に囲まれているから、揺らがないだけのことなのである。地球は1つ、だから世界史も1つで世界史叙述はどこでも同じ、などということはないのである。実は大学以前の教育には世界史という科目がない国も存在している。教科書に頼っていても、リアルな世界は見えてこない。恐れずに、世界の多様性に揺さぶられることこそが、大学の学びなのである。

(本章の写真は、いずれも筆者が撮影したものである。)

参考文献

- Beck, R. B., Black, L., Krieger, L. S., Naylor, P.C., & Shabaka, D.I. (2007). *World History: Patterns of Interaction*. McDougal Littell.
- Tignor,R., Adelman, J., Brown, P., Elman, B., Liu, X., Pittman, H., & Shaw, B. (2011). *Worlds Together, Worlds Apart: A History of the World*, volume1. W. W. Norton.
- Tignor.R., Adelman, J., Aron, S., Kotkin, S., Marchand, S., Prakash, G., & Tsin, M. (2011). *Worlds Together, Worlds Apart: A History of the World*, volume2. W. W. Norton.
- 김형중, 장문석, 서각수, 장두호, 김강아, 김정희 (2014). 『고등학교 세계사』 금성출판사. (Kim·Hyunjoon, Chan·Munsok, So·Kaksu, Chan·Douho, Kim·Kangya, Kim·Jonghee (2014). 『高等学校世界史』金星出版社.)
- イ・インソク, チョン・ヘンニョル, パク・チュンヒョン, パク・ポミ, キム・サンギョ, イム・ヘンマン(三橋広夫, 三橋尚子訳)(2013). 『世界の教科書シリーズ39 検定版 韓国の歴史教科書—高等学校韓国史』明石書店.
- 朱漢国主編 (2007). 『歴史』全6冊. 北京師範大学出版社.
- 薛化元主編 (2012). 『歴史』第一冊. 三民書局.
- 薛化元主編 (2013). 『歴史』第二冊. 三民書局.
- 古偉瀛, 王世宗編著 (2007). 『歴史』第三冊. 三民書局.
- 古偉瀛, 王世宗編著 (2008). 『歴史』第四冊. 三民書局.

人民教育出版社歴史室編著(2003).『中国近現代史』上冊.人民教育出版社.
人民教育出版社歴史室編著(2000).『中国近現代史』下冊.人民教育出版社.
人民教育出版社歴史室編著(2003).『世界近現代史』上冊.人民教育出版社.
人民教育出版社歴史室編著(2003).『世界近現代史』下冊.人民教育出版社.
人民教育出版社歴史室編著(2003).『中国古代史』人民教育出版社.
曹大為, 趙世瑜(2004).『歴史』全3冊. 岳麓書社.

もっと知りたい人のためのブックリスト

- ・長谷川修一, 小澤実編著 (2018).『歴史学者と読む高校世界史』勁草書房.
- ・アン・ビョンウ, キム・ヒョンジョン, イ・グヌ, シン・ソンゴン, ハム・ドンジュ, キム・ジョンイン, パク・チュンヒョン, チョン・ヨン, ファン・ジスク(三橋広夫, 三橋尚子 訳)(2015).『世界の教科書シリーズ42 東アジアの歴史—韓国高等学校歴史教科書』明石書店.

明石書店の「世界の教科書シリーズ」は各地のその国の歴史教科書を中心に訳出したもので、さまざまな国や地域のものがある。ここでは、自国史以外の訳出例として一例をあげるが、ご自身の関心に基づいていろいろ手に取ってみてほしい。